

1 調査年月日

令和 元年 12月 18日（水）～20日（金）

2 調査項目及び調査地

【調査項目】

- 富山県朝日町 あさひ総合病院
 - ・あさひ総合病院の病棟再編の取り組みについて
- 石川県 佛子園ほか
 - ・CCRCモデル「シェア金沢」の視察ツアー
- 石川県輪島商工会議所
 - ・次世代交通対策事業について

【調査地】

- ・富山県朝日町
- ・石川県小松市、白山市、金沢市
- ・石川県輪島市

3 議員名

- ・干 場 芳 子
- ・諏訪部 容 子
- ・内 山 祥 弘
- ・稲 守 耕 司
- ・佐々木 聖 子

4 調査報告書

- ・別紙のとおり

5 その他

【1日目】

②あさひ総合病院の病棟再編の取り組みについて

令和元年12月18日（水）報告者：干場 芳子
対応：あさひ総合病院 地域医療推進室

《富山県朝日町の沿革》

富山県の東端、新潟県との県境に位置し、人口11,850人、世帯数4,788世帯（令和元年12月1日）面積は226.30km²であり「中部山岳国立公園」と「あさひ県立自然公園」に指定されている風光明媚で観光資源豊かな町となっている。ヒスイ海岸や舟川べりの春の風景などが有名であり、郷土料理はタラ汁、ビーチボール協議発祥の地でもある。近年、富山大学発のベンチャーの企業誘致、サテライトオフィス誘致等の産業振興の取り組みも行っている。

※平成28年度にスタートした第5次朝日町総合計画では、あさひ総合病院の病棟再編を含めた今後のあり方やその活用方法を協議するため「あさひ総合病院病棟再編等検討委員会」を同年6月に設置し、改革をすすめ現在の病棟再編に至っている。

■視察の目的

江別市立病院が近年経営悪化の状況にあることから、改善・健全化に向けた取り組みの手法等を、富山県朝日町の医療再生とまちづくりにおける「あさひ総合病院」の改革から参考とするため視察した。国が進める自治体病院・公的病院の統合再編の動きから、改めて地域で公的病院のあり方を議論し、住民自ら決めていくことが求められ重要と考える。

■視察項目

①病棟・病床を削減するに至った経緯について

朝日町は、2008年～2012年の合計特殊出生率1.35と県内で最も低く、また、2015年の人口社会減は-94人で人口の0.7%が町外に流出し、厳しい人口減少に直面していた。

「あさひ総合病院」は、かつては経営状態のよい病院だったが、2005年11月に約80億円の費用をかけて病院の新築移転を行った時から深刻な経営危機に直面した。2004年の新医師臨床研修制度の導入による全国的な医師不足は、同院にも影響を与え、2005年に16名在籍した正職員の医師が、2008年には11名に減少した。要となる内科系医師が著しく減少し、2005年の7名が2008年には2名に減り、その後患者受け入れ困難となり、2008年4月に49床を休床、救急診療体制も一部縮小に追い込まれた。医師だけではなく看護師不足も深刻な状況となり、看護師の平均年齢は上がり、減少傾向となっていく。加えて、医療技術職の雇用にも苦勞することとなり、こうした病院の抱える問題がなかなか改善せず、病院の収益状況は悪いまま、苦難の病院運営が続いた。経営悪化により、当時手持ちの現金が4億円まで減少し、町からの繰出金も増額されていたため、これ以上の財政支援は厳しく、経営改善をして病院財務を安定させる必要があった。職員の経営意識の向上も必要であったことから、対話を重視し、職員の意識を変えながら、経営改善をするコ

ンサルタントにアドバイスを受けることとなった。診療報酬の加算取得や材料費の縮減といった収益面の取り組みだけでなく、医師や看護師などの人材を確保するため、地元大学医学部への寄附講座開設、医学生の地域実習受け入れなどを進めた。2014年には病院の改修工事を4億9,755万円（企業債2億2,430万円、過疎債2億2,410万円、富山県医療介護総合確保基金4,728万円）の費用をかけ実施し、病床数を199床から109床に減らす一方、在宅医療や認知症ケア、介護予防、医療・介護連携などを進められる拠点を院内に設置することで、病院の生き残りに向けたバージョンアップに努めた。その際、女性従業員用の宿直室など、女性が働きやすい職場環境の整備に努めることで、人材確保にも考慮した。併せて一連の改革をすすめる際、住民や町議会への丁寧な説明に加えて、住民が地域医療の当事者として、自分に何ができるかを考えてもらう「朝日町地域医療マイスター養成講座」を開催し、住民の主体性を引き出す努力も講じている。

②地域包括ケア推進の施設を整備したことによる効果

地域包括ケア病棟は、急性期治療（手術や検査などの治療）を経過し、症状が安定した患者さんに対して、在宅や介護施設への復帰支援に向けた医療や支援を行う病棟である。

病棟再編前に在宅支援、復帰支援を行う回復期リハビリ病棟があり、これと似たような機能を持ち、診療報酬の点数が高い地域包括ケア病棟を新設した。入院期間は患者さんの状況によって異なるが、保険診療上60日以内とする。入院費用については、入院費1日当たりの定額制とするが、一部の投薬・注射・手術料、食事料、室料等は除く。高額医療費制度での限度があるので負担上限がある。

③廃止病棟の活用の詳細について

高齢者医療の先進モデルとなる病院を目指し、機能再編（バージョンアップ）を図ることとした。（図1参照）

病棟数を4病棟から2病棟（一般病棟56床、地域包括ケア病棟53床）に再編し、病床数を199床から109床に減少させた。廃止する3階病棟については、医療職員が働きやすく、勉強しやすいよう、更衣室・休憩室・仮眠室を充実させ、不足している会議室や研修室、図書室、職員食堂などに改修した。同じく6階病棟については、地域医療推進センターとして、院外にあった町在宅支援センターを移設、居宅介護支援事業所として居宅介

改修前		改修後（2019年4月～）	
3階	一般病棟 48床	3階	会議室、実習室、更衣室、図書室、職員食堂、休憩室、仮眠室、倉庫等
4階	一般病棟 54床 （うち結核病床 5床）	4階	一般病棟 56床
5階	一般病棟 49床 ※休床（平成20年4月～）	5階	地域包括ケア病棟 53床
6階	回復期リハビリ病棟 48床	6階	<ul style="list-style-type: none"> 在宅介護支援センター 認知症院内デイサービス（ひだまり） 認知症カフェ（いきいきカフェ） ロコモセンター 訪問リハビリテーション 通所リハビリテーション 地域医療推進室 地域医療連携室
合計	199床	合計	109床
		その他	1階 外来点滴室（化学療法室） 2階 診療情報管理室 扁平地ネット参加

「急性期から在宅まで」地域医療を支える中核病院として高齢者医療の先進モデルを目指す

図1. あさひ総合病院のバージョンアップ

護支援、訪問介護、訪問看護を実施する。新たにロコモステーションと認知症支援センターを設置した。富山大学附属病院への新しい寄附講座の部屋が設置され、病院としての待望の内科系医師2名が常勤として勤務し、地域医療の研究を行っている。

病床を大幅に減らすことに対する住民の心配もあったとのことだが、これまでの病院の医療再生の努力や2015年から開いているマイスター養成講座による意識の向上もあり、理解が得られているという。

④職員の配置数及び看護師の勤務体制について

看護師の配置数を高めたことで、看護管理や認定看護師の研修を受けやすい環境となっている。看護師配置数等の推移について、図2に示す。

⑤救急、急病の受け入れ態勢について

あさひ総合病院では、年間を通して夜間や休日（土・日曜日、祝祭日、お盆、年末年始）も24時間体制で救急外来の診療を行っているが、急な体調不良やけが等の際にも受診できる。ただし、緊急性があり高度の専門性を必要とする場合には、高度急性期病院への受診を勧めたり、転送したりすることを前提として行っている。

	平成29年4月	平成30年4月	3 病棟 から 2 病棟 体制 へ	平成30年8月	平成31年4月	
3階病棟	26	31				
4階病棟	30	32			34	37
5階病棟					33	33
6階病棟	8	8				
計	64	71		67	70	
平成29年度	平均夜勤回数	7.4回				
	月10回以上職員	183人				
平成30年度	平均夜勤回数	6.6回				
	月10回以上職員	56人				
令和元年度 (4月～11月)	平均夜勤回数	6.3回				
	月10回以上職員	8人				

図2. 看護師配置数等の推移

⑥地域の医療体制と連携の状況について

年に1回、地元医師会との意見交換会を実施している。その他、訪問診療を行っている開業医が学会等出張する場合、看取り対応について病院の医師が行うといった連携をしている。

新たな病院再編を実施していくために自治体に求められる対応は、①住民を含めた関係者への丁寧な説明と合意形成、②単に縮小だけを論ずるのではなく、何でも相談できる医療の窓口としてのプライマリ・ケアや在宅医療、医療・介護の連携を強化する体制、つまり住民の生活を支える施策の検討、③医師など人材確保、これらの視点を考慮しつつ、地域の医療提供体制を構築していくことが重要と認識した。

【2日目】12月19日(木) CCRCモデル「シェア金沢」の視察ツアー

諏訪部 容子

生涯活躍のまちのモデルである「シェア金沢」などを運営する佛子園が運営する3つの施設を見学しました。個別の視察対応は受け付けていないとのことで、視察ツアーに参加しました。

11時20分～12時20分 西圓寺視察

西圓寺は石川県小松市野田町にあるお寺で、廃寺になりそうなので何とかならないかと相談され、佛子園のスタッフと障害児が定期的に清掃活動を行っていたところ、近隣住民も清掃に参加するようになり交流が生まれた。以前、別の地域で知的障害者用のグループホームを新設しようとした際に、地域住民に理解を得られなかったという経験があった。障害児に対する地域住民の理解を進めるためには、閉鎖的な施設になるのではなく、自ら地域づくりに積極的に関与することが大切であると考えたそうです。

現在の西圓寺は、生活介護と高齢者デイサービス、障害者の就労支援施設、地域住民が利用できる温泉入浴施設から成り、さらに敷地外に「ゴッチャ！ウェルネス小松」「野田町珈琲」「ボディケアゆらり西圓寺」を併設している。高齢者、障害者、子ども達、地域住民が「ごちゃまぜ」に集う場所となっています。ごちゃまぜになることの相乗効果により、高齢者、障害者、子ども達、地域住民が一緒になって、より良い地域づくりができるとのことです。この「ごちゃまぜ」という言葉がその後の佛子園の施設展開のキーワードとなっています。

見学ツアーでは、西圓寺の本堂では高齢者デイサービスや生活介護が行われている傍らで、説明を聞き、昼食のそばをいただきました。以前、障害者就労支援施設A型の作業所で昼食をとったことがありましたが、時々大きな声が聞こえてきましたが、西圓寺でもそのようなことがありました。相互理解が進んでいけば、そのような声も気にならなくなるとのことで、ごちゃまぜに活動していることが、共生につながっているとの事でした。

14時～15時30分 B's 佛子園、行善寺視察

B's 佛子園は石川県白山市にあり、佛子園のヘッドオフィス、天然温泉、料飲施設、高齢者通所介護、短期入所施設と障害者就労支援施設の二つの側面を持つ多機能コミュニティ拠点の「三草二木 行善寺」、児童発達支援センター「B's こどもラボ」、0～2歳児を対象とした「B's 保育園」、健康増進施設「ゴッチャ！ウェルネス白山」、診療所「B's クリニック」などから構成される施設です。

行善寺では地域住民が利用できる温泉入浴施設を作ったことにより、地域住民が「ごちゃまぜ」な行善寺に積極的に参加するようになり、また、その環境が転入者を増加させたとのことです。したがって、2016年に行善寺を改装する際にも温泉施設が重要であると考え、天然温泉を地域住民に開放しているとの事です。さらには地域住民や近郊の大学生が自由に活用できる「住民自治室」を設置して、地域課題を解決する一助としているとの事でした。

子どもと高齢者は相性が良いといわれ、子どもと高齢者が関わりを持つことができるようにする試みが、各地で行われています。高齢者施設と幼稚園・保育園などを近接して設置し、相互交流を図っているという施設を視察したこともありました。佛子園が展開する施設は、さらに障害者との交流も図っていて、交流の相乗効果も見られます。今後の社会福祉を考えるうえで、「ごちゃまぜ」というキーワードがますます重要で、求められていくものではないかと思いました。

16時15分 ～ 17時45分 シェア金沢

シェア金沢は金沢市中心部から東に車で10分ほどのなだらかな丘陵地にあり、その敷地面積は約3万5700平方メートル(約1万1000坪)、サービス付き高齢者住宅、障害児、障害者入所施設、児童発達支援センター、放課後等デイサービスセンター、学生対象の賃貸住宅、天然温泉の入浴施設、レストラン、高齢者デイサービス、訪問介護ステーション、障害者向けグループホーム、全天候型グラウンド、クリーニング取次店、コインランドリー、NPO法人および民間企業オフィス、カフェ&バー、キッチンスタジオ、ボディケア店、共同売店、ブータンの工芸品ショップなどがあり、一つの街と言っても過言ではない。学生にはボランティアを条件に住居費を安く設定したり、サービス付き高齢者住宅に居住する高齢者もボランティアに参加しているとのことでした。また、シェア金沢では、佛子園は社会福祉に関わる事業のみを行い、全天候型グラウンド、クリーニング取次店、コインランドリー、カフェ&バー、キッチンスタジオ、ボディケア店、共同売店、ブータンの工芸品ショップなどを他事業者任せることにより、街に多様な機能を持たせることが出来た。その他、地域住民の要望を聞いてドッグランを作ったり、路線バスの停留所を敷地内に引き込み、屋根付きにするなど地域に溶け込む様々な努力も惜しまない。

障害児、障害者、高齢者、そして健常者が「ごちゃまぜ」になるシェア金沢の建築計画には、前例がないこととして地元行政からの理解に苦しむ指導があったとのこと。福祉施設整備の助成金が対象によって分かれているため、例えば「障害者用の廊下と高齢者用の廊下を2本作りなさい」というような指導を受けたりといった、常識では考えられないような縦割り行政の弊害を感じたそうです。

シェア金沢に実際に住んでいる人は100人程度とのことですが、天然温泉の入浴施設、レストラン、カフェ&バー、キッチンスタジオ、放課後等デイサービスセンター、ドッグランなど敷地外からの交流人口が多いとのことで、まちづくりにも大きく寄与していると思いました。

ツアーがシェア金沢に到着したのは夕方、すっかり暗くなっており、ショップなども閉店間際、放課後等デイサービスの子供たちも帰宅した後で、残念ながらその賑わいを感じることはできませんでした。

全ての施設に共通するキーワードは「ごちゃまぜ」ですが、実際に施設を見ると「ごちゃまぜ」という感じはなく、普通に生活しているという印象でした。超高齢社会の日本で、誰もが安心して地域の中で暮らしていくという難しい課題を解決するための一つの良い事例

であると感じました。

【3日目】 12月20日(金) 次世代交通対策事業について

佐々木 聖 子

【調査項目】

- ・次世代交通対策事業について
輪島商工会議所が実地している、WA-MO（ワーモ）が結ぶ「人」と「街」の視察

【調査地】

- ・石川県輪島市

【対応者】

- ・輪島商工会議所 坂下 利久 専務理事

【調査目的】

- ・江別市における、江北地区の新たな交通手段（郊外部の自治会とタクシー事業者による高齢者等の通院・買い物支援）デマンド型交通の導入が実用化に向けて試験運転が行われている中、今後の参考とする

《石川県輪島市の概要》

能登半島の北西に位置し、東西約 42 km、南北 31 km、面積約 426 km²、豊かな緑と海に囲まれ、80 km余りの海岸線は能登半島国定公園に指定。輪島塗、輪島朝市などの伝統、観光資源を有し、輪島塗と漁業を主な地場産業とする奥能登の中核都市。人口は、平成 18 年の隣接町との合併当時は 3 万 4 千人が、平成 27 年の国勢調査では、27,205 人、高齢化率 43.1%。

《輪島市の交通状況》

県都金沢へは市の中心部から約 120 km、車で 2 時間。「のと里山空港」が車で約 25 分で、羽田空港間に 1 日 2 往復が運航されている。鉄道は廃止。民間バス会社により路線バス、特急・急行バス（金沢間）、高齢者の外出支援と市街地活性化を目的とし、旧市街地を循環するコミュニティーバス（市委託）が運営されている。タクシーは市内に 8 事業者。市ではバス停留所から半径 500m 以上を公共交通空白地域と定義し、その解消を課題としている。

《地域の現状と課題》

多くの市町村が抱えている課題が、地域の活性化、高齢者比率の上昇、人口減少・人口流出による公共交通機能の低下等で、このような地域の自治体の財政状況は極めて厳しく、公共交通の充実は望めず、逆に電車やバスの路線は減便、廃線になっているのが現状です。

こうした問題に対して、地域の实情に合わせ、新たに次世代交通システムとして導入・構築し街作りに取り組む重要なポイントとして、「地元の高齢者の外出を増やすこと」があります。商店街等でのコミュニケーションが増え、ゆっくりと買い物ができるようになり、地域の活性化に繋げようと、商工会議所会頭の強い思いで取り組まれている事業です。

ここで着目されたのが、ゴルフ場の電磁誘導カートでした。ゴルフ場において自動走行のカートは、決められた停車スポットでは自動で止まり、坂道ではスピードの自動制御も行うなど、20年以上も前から蓄積されている自動走行の実績でした。短い距離の移動手段として十分に役割を果たすものと考え、また自動走行はドライバーの負担を軽減することから退職後の高齢者でも比較的安全に運転でき、これにより高齢者の社会参画も望むことができる。さらに電動のためエコでもあるカートは、現地輪島では「WA-MO（ワーモ）」という愛称で使われています。

《WA-MO（ワーモ）事業について》

2010年（平成22年度）の交通手段調査から始まり、2011年（平成23年度）～2013年（平成25年度）までの3年間は、愛・地球博成果継承発展助成事業の支援を受け、2014年（平成26年度）からは軽自動車のナンバーを取得し、公道実験を開始し、2016年（平成28年度）からは、市内3コースで調査走行を実施。地域を支える足として、エコモ財団による資金支援の活用による運転手となるシルバー人材の育成や、産業技術総合研究所の自動走行を活用した端末交通システムの実証評価地域に選定（事業年度は平成28～30）される。

現在は、カートは運転手も含めて4人乗りと7人乗りの2種類、計7台を保有し、1周約3kmの3ルート（一週24分1コースと34分2コース）を朝8時から17時迄の間、10時以降は20分と30分間隔で運行中。地中に埋め込んだ電磁誘導線に沿って走る自動区間も、1ルートの一部約1kmが対象だったのが、4月より同ルート全体の3kmに広がる。ドライバーは普通免許を持った商工会議所職員が交代で3名とシルバーの方で乗務。運賃は無料で、停留所で誰でも乗り降り可能。時速10kmで走行し、自動走行区間では運転手が手を放したままハンドルが回転し、停留所が近づくと自動でウインカーが作動し停車する。ルート内には国道の区間も数100m含まれ、交差点で曲がるのも自動で、ドライバーは路上駐車を回避する時にハンドルを回します。これまでの実証実験で安全性や利便性が確認されているとのことです。駐車場や充電は市役所の敷地内を使用し協力を得ているとのことでした。2018年度の利用者数は4,733人と前年度より24%の増加となり、病院などを行き来する市民の利用が多いとのことです。

【視察】

前段、時間の都合から自動走行は体験出来ませんでしたが、1台に5人で乗車体験をしました。ゆっくりとした走行で見晴らしは良く、周囲はビニールシートで囲む事ができるので、雨風は防げますが車高が低い為、冬期の積雪によっては当日の朝に運行判断を行い運休もあるとのこと。江別に於いては、カートの使用も積雪の多い冬期間は暖房対策も必要となり夏季限定での運行なら可能かと思います。ドライバーの負担が少なく運転免許のハードルが低い、防寒や雪道対策が可能な乗り物があれば、高齢者の外出を支援するとともに、シルバーの活用により人材確保と、高齢者の社会参加も期待できます。これとは別に、輪島市は市内循環型コミュニティバス「のらんけ」を運賃一律100円で、4コース（1日各コース8本）を民間バス会社に委託し運営しています。